

〈論文〉

生まれ変わりとしてのルネサンス —— ミシュレの死生観とルネサンス概念の誕生 ——

比留間 亮平

1. はじめに

今日の日本でも、新聞紙上に「医療ルネサンス」「教育ルネサンス」という言葉が躍るほどルネサンスという言葉は私たちにとってなじみ深いものとなっている。こうした一般的な用法におけるルネサンスはおおむね何らかの領域における意識や行動の根本的な革新、改革などを指す言葉として用いられていると言えるであろう。こうした用法が14-16世紀のイタリアで生じた歴史現象としてのルネサンスに起因していることは明らかであるが、このルネサンス Renaissance という言葉はもともと「生まれ変わり、再生」などを意味するフランス語であって、ルネサンス発祥の地とされるイタリア語ではない。イタリア語ではこれをリナシメント Rinascimento と呼ぶが、日本語だけでなく英語やドイツ語でもこのルネサンス Renaissance というフランス語が用いられている。こうした歴史概念としてのルネサンスを提唱し、定着させた人物が、本論の対象となる19世紀フランスの歴史家、ジュール・ミシュレ（1798-1874）である。

ただ、ミシュレはこのルネサンス（リナシメント）という語そのものを発明したわけではない。ダヴィンチやミケランジェロに代表されるような14-16世紀イタリアにおいて生じた新たな芸術運動を指す用語としてのルネサンスは、1550年に当時の芸術家たちについて記したヴァザーリの『美術家列伝』においてすでに言及されている。ヴァザーリは古典古代の芸術がローマ帝国崩壊によって滅びた後、この時代において再び蘇ったということのリナシタ rinascita という語で語っているが、いわゆるルネサンスはこのリナシタ（リナシメント）に由来するもので、こうした芸術運動を指す用語としてのルネサンスはミシュレ以前から一般的に用いられていた。しかし、こうした用法はあくまでも芸術の領域に関するもので、今日のルネサンス概

念に見られるような意識や行動の根本的革新といったニュアンスはそこに含まれていなかった。

これに対し、ミシュレはルネサンスという概念を単なる芸術運動としてではなく、より広い文脈において理解した。すなわち、ミシュレはその大著『フランス史』において、ルネサンスを「世界と人間の発見」という世界的な意味を持つ現象が生じた中世から近代への転換の時代として描き出したのである。神中心の世界から人間中心の世界への移行、魔術的世界観から科学的世界観への移行、無知な農村社会から教養ある市民社会への移行など、今日ルネサンスないし近世と呼ばれている時代の特徴とされるものの多くが、「この英雄的な時代」に冠せられた。現在広く受け入れられているルネサンス論と「世界と人間の発見」テーゼそのものは直接ミシュレに基づくものではなく、その少し後に活躍した歴史家であるブルクハルトに基づくものであるが、ブルクハルトもその古典的名著『イタリア・ルネサンスの文化』において、自身の「世界と人間の発見」というテーゼがミシュレの着想に由来するものであることを認めている。

(訳注：ルネサンス期以降の精神は) 小さな二つのことを忘れてただけだったのだ。つまり、それ以前のすべての時代以上にあの時代に属していた二つのこと、世界の発見と人間の発見である。16世紀はその大きな、かつ正当な伸展においては、コロンブスからコペルニクスに、コペルニクスからガリレオに、そして地球の発見から天球の発見に至る。そこにおいて人間は自らを再び見出した (ミシュレ『フランス史Ⅲ』、13)。

ルネサンスの文化は、はじめて人間の完全な内実をそっくりそのまま発見して、それを明るみに出すことによって、世界の発見にさらに大きな功績を加える。注：この適切な表現はミシュレ氏の『フランス史』から借りたものである (ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』、350-351)。

このように今日のルネサンス概念が構築されるに際しミシュレが果たした役割は非常に大きいのが、今日ルネサンス概念についての研究史が素描される

際にミシュレの名が言及されることはほぼなく、ほとんどの場合はブルクハルトから記述が始まるというのが通例となっている。というのも、このようなミシュレのルネサンス観は決して単なる歴史学的研究の成果として生まれたものではなく、彼の特異な死生観や宗教観、さらに私生活上の危機という極めて個人的な事柄、状況によって生まれたものであったからである。ミシュレはそのことを自分でもはっきり認めており、その意味でミシュレの歴史学は客観性を旨とする今日の学問的態度の対極に位置している。本論ではまずミシュレの特異な歴史学的方法論と死生観を明らかにし、次いでそこからどのようにルネサンス概念が生まれたのかを見ていきたい。

2. 「歴史」概念とその革命

アंकティルのフランス史（1805）とミシュレのそれ（1833）の間には28年の隔たりしかありません。しかし、そう思うのが間違いなのです。アंकティルとミシュレの間には、革命とも言うべき大断絶があります。その間に「歴史」が生まれたのです（フェーブル 1996、61）。

アナール第一世代を代表する歴史家リュシアン・フェーブルは、このようにミシュレを「歴史」及び「歴史学」の創始者と語り、極めて高く評価する。実際、ミシュレは自身が「新たな学」の創設に携わっていると強く感じており、そして自らが生み出しつつある歴史こそが真の歴史であり、それを扱う学問こそが真の歴史学であると述べていた。

しかし、このような言葉は私たちの目には奇異に映る。歴史学と言えば、古代ギリシア・ローマ以来連綿と続いてきた、それこそ哲学と並んで長い「歴史」を持つ学問のはずではないか。それがたかだか1世紀半ほど前の19世紀半ばに誕生したとは、一体どういうことなのか。フェーブルが述べる通り、確かにここには、歴史概念における断絶がある。そしてこの断絶こそが新たな歴史学を生み出すこととなったのであるが、ここではそれを検討するため、歴史が西洋世界においてどのように認識され、また扱われていたのかの歴史的過程をごく簡単に素描することとする。

改めて述べるまでもなく、ミシュレやフェーブルが述べるようにそれまで「歴史」が存在していなかった、などと主張することは事実と反する。聖書や神話における歴史的記述は別にしても、西洋世界がその歩みを本格的に始めた時、すなわちギリシア・ローマの古典古代の時期においては、既に「歴史の父」ヘロドトスを初め、トゥキディデスやプルタルコス、タキトゥスやリヴィウス等々、数え切れぬほどの歴史家と彼らが語る歴史が存在していた。ローマ帝国崩壊後もそのような努力はほとんど間断なく続けられ、偉大な支配者たちに関する伝記的著作や、諸国家や諸都市それぞれについて起源から始まり現在までの歴史を伝える通史などが伝えられてきた。そしてこのようにして伝えられ、学ばれてきた歴史が中世から近代に至る学校教育の現場でいかなるものとして理解されていたのかについては、下記の16世紀の人文主義者であるファン・ルイス・ヴィーヴェスの『学問伝授論』が参考になるであろう。

歴史の中からまず捉えなければならないのは年代区分法である。次に、何か模倣すべき善や避けるべき悪の模範を示してくれるような出来事や言葉を取り出すべきである（ヴィーヴェス『学問伝授論』、218）。

それから歴史の知識を概括して教えるべきである。その場合、道路を道標で区切るように、ある特徴で時代を区分し、徴を付けなければならない。たとえばアダムからノアの洪水の時期まで、……マケドニアのアレクサンドロス王まで、ついでそこから第一次ポエニ戦役まで、さらに第二、第三ポエニ戦役へと繋がるのである。それからスラとマリウスの時代まで。……そしてこれら各々の期間の特徴をなす有名な戦争、記憶すべき都市の建設、著名人の出現などについて、全般に渡って説明してやらなければならない（同書、138）。

このようにかつての「歴史」とはあくまで年代区分法に基づいて捉えられた「年代記」であり、そしてその区分は戦争や事跡、及び支配者の交代によって特徴づけられる。逆に言えば、彼らにとって歴史の主人公となるのは主要な戦争や偉人であり、歴史はそのようにして細分化された戦史や政治・法制史、あるいは伝記などの束として理解されている。この歴史は戦争や政

治、偉人などの「範疇」により、そしてそれらの特徴によって決定されることの歴史的区分という「時期」により、縦と横に分断されている。

このような区分に基づいた上で歴史的事実を伝えるのが歴史教育であり、そしてその事実を確定するのが歴史学であった。よって、学問としての歴史学が対象とするのは、あくまで事件の詳細や支配者の事跡であって、今日の歴史学が対象とするような諸テーマ、たとえば封建制や領邦国家といった社会システムに関する問題、貨幣の流通や農業技術の進歩、貿易品目とその流通量の変化といった経済システムに関する問題、また民間信仰や習俗、慣習に生活様式といった行為のシステムに関する問題などは、いまだ歴史学の主たる対象とはなっていないのである。

ここにおいて冒頭の「歴史が生まれた」という言葉の意味が明らかとなる。ミシュレは歴史を事件史や伝記、逸話などから成る分断された集合体から解放した。すなわち、一方では歴史学の対象を国家や為政者レベルから民衆レベルの社会にまで引き下ろし、そこにおける意識と活動の変遷として歴史を基礎づけた。また他方では戦史、法制史、美術史などの領域に細分化されていた歴史を、彼の言うところの「一つの全体的な生命」、人格としての国家あるいは国民¹⁾の活動、すなわち「全体史」として統一したのである。リュシアン・フェーブルやフェルナン・ブローデルといった人々が先駆者としてのミシュレを高く評価する理由もここにある。以下は晩年のミシュレが1869年にその『フランス史』に付した「全体としての生命の復活」と題した序文からの引用である。

フランスにはそれまで年代記はあったが、一つの歴史もなかった。優れた人々はフランスを、とりわけ政治的観点から研究していた。しかし誰一人、フランスの活動（宗教的、経済的、芸術的等）の種々様々な面での発展を微細に洞察していなかった。また誰一人フランスを、それが形成された自然的地理的諸要素の生きた統一体として一望の下に収めようとは、まだしていなかった。私が最初にフランスを一つの魂として、一人の人として眺めたのである（ミシュレ『1869年の序文』、98）。

要するに歴史は（中略）二つの方法の点でまだまだ弱いように私には思えた。あまりにも物質的でなかったのだ。人種を考慮しながら、土壌や

気候や食べ物や、物理的なまた生理的な多くの状況を考えに入れなかったからだ。あまりにも精神的でなかったのだ。法や政治的行為を語りながら、思想や風俗、そして国民の魂の内的な進みゆく大きなうねりについては語らなかったからだ（同書、104）。

私は孤立していた。世に出されていたのはほとんど政治史だけで、統治行為や諸制度のことがいくらか語られているだけであった。この政治史に付随し、その説明となり、部分的に基礎づけるもの、つまり社会、経済、産業の諸状況や、文学、思想の状況といったものは全く考慮されていなかった（同書、124）。

3. ミシュレの「歴史学」とその方法論

サロンは私にとってたいへん敵対的なものになった。正理論派やカトリックたちが、そこでは絶え間なく私に戦いを挑んでいた。私のことを細部ではほとんど攻撃せず、むしろ褒め称えることで損ない、いかなる権威もないものにしてしまおうとしたのだ。「作家ですね、詩人ですね、想像力の人ですね」といった具合だ（同書、122）。

しばしば「大歴史家」と尊敬を込めて語られるミシュレであるが、彼はその生前から今日に至るまで多くの非難に晒されてきた。そこには前節で述べたようなミシュレの「新たな歴史学」に対する保守側からの反発も含まれるが、そのより多くは彼の方法論に対する批判であった。すなわちその手法が非学問的であり、彼の著作は歴史家の作品というよりむしろ詩人のそれであるとみなされたのである。この非難が正当であるか否かはともかく、ミシュレの方法論が極めて独特で、他の歴史家とは一線を画すものであるのは確かであろう。よってここではこの問題を検討するため、その方法論の概要を明らかにしたい。

まず、ミシュレが作家、詩人、想像力の人として非難されているとしても、彼が歴史史料を軽んじていたとか、それを無視して議論を組み立てたなどと論ずることは間違いである。むしろミシュレはそれらを見捨てた歴史小

説や学術的な歴史解釈などに対する強い憤りをしばしば表明している。彼はコレージュ・ド・フランスの教授でもあったが、同時に1830年から国立古文書館の歴史部門主任ともなっており、そこで片時も休むことなく膨大な古文書の類を研究し続け、そしてそれまで未公刊であった数多くの写本をその歴史書の中で活用している。その意味でミシュレが「歴史にそんなにも確かな土台を持たせた」（同書、123）と主張するのも、あながち根拠のないことではない。むしろ前節で述べたとおり、それまで政治・法制史などに限定され、活用されてこなかった史料を数多く引用したという点で、歴史的データの蒐集に関するミシュレの態度には非難されるべき点は少ない。

それゆえ、彼がしばしば「詩人」として非難される理由は、用いた歴史史料の不十分さや恣意性などにあるのではなく、彼がそれらのデータを扱うその仕方にある。それは史料を客観的な対象として記述するのではなく、自らの内部でその史料、すなわち死者と一体化しながら、自らの内部において死者を蘇らせ、彼らに彼らの声を語らしめるというミシュレ独特の方法である。ミシュレにとり、歴史とは復活、すなわち偉人から民衆まで、かつて生きていた人々全てを蘇らせ、そして彼らに生命と統一性とを再び与えることであった。

私が20年間もさまよい歩いた国立古文書館の人気のない陳列室、あの深い沈黙の中から、ぶつくさつつぶやく声が、その間私の耳まで届いてきた。あの古い時代にあって押し殺された数多くの魂のはるか昔の苦しみが、小さな声で訴えかけていた。……「歴史よ！我々を心にかけてくれ。おまえの債権者たちが催促しているのだ！我々はおまえの進むべき道のために、死を受け入れたのだから」。私は彼らに対し何をすべきだったのだろうか？彼らの戦いを語ること、彼らの陣営に自らを措くこと、勝利をも敗北をも半ば分かち合いながら共に歩むことではなかったか？……私ははるかに多くのことを試みた。彼らに彼らの生命と、芸術と、そしてとりわけ権利を取り戻させようとして、何から何まで全てをもう一度取り上げてみたのだ（同書、132-133）。

町や自治都市がやっと姿を見せ始めていた。だが農村は？14世紀以前の農村を誰が知っていよう？この闇に閉ざされた大いなる世界、無数

の知られざる集団、それがある朝、姿を現す。……ジャック（訳注：田舎百姓の一例）の姿が突如立ち上がってきて、私の行く手を遮ったのである。……あれらの苦しみを私は即座に感じ取った。それは私の中で時間のはるか深みから上昇してきた。彼だったのだ、そして私なのだ（同じ魂！ 同じ人間！）、こういったこと全てに苦しんできたのは。……この千年の熱い涙、一つの世界と同じように重い涙が私の下にやって来て、ページを貫いた（同書、127-128）。

ミシュレは史料を読み漁りながら、また歴史を叙述しながら、死者と同一化する。すなわち自らの内部において死者たちを「復活」させる。なぜなら、「人は自分が作り変えるものしか理解しない」からである。歴史家は歴史を叙述するために、まずそれを自らにおいて再創造しなければならないとミシュレは主張する。ロラン・バルト（1971、17-28）はこれをミシュレと歴史の共生関係と呼ぶ。実際、「歴史を喰い漁る人」ミシュレは、自らが嫌悪するような人々について研究し、叙述している時には、まるで消化不良を起こしたかのように精神的なそれだけでなく肉体的な苦痛をも感じていた。

ここにおいて、歴史家はもはや単なる客観的な事実の語り部ではなくなる。なぜなら、語っているのはかつてその歴史の担い手であった死者たち、歴史家の内部において再生し、生命と統一性とを取り戻した歴史的主体、集合的生命としての彼らなのであるから。歴史家は死者と同一化する。それゆえミシュレが語る歴史とは徹底的に主観的なものとなる。

そこでは私個人の情熱が普遍性となり、私の見いだした普遍性が情熱となり、私の描き出す民衆が私を作り、私が民衆に生命を吹き込むようになる（1841年6月18日付『日記』）。

このような「歴史」を語るゆえにこそ、ミシュレはある人々によつては「詩であり、情熱であるとしてあんなにも軽薄に非難され」（『1869年の序文』、129）、また他方ではその歴史叙述が持つ生命力や統一性のゆえに敬意を持って扱われるのである。ミシュレにおいて、この復活は単なる一人の為政者、一人の英雄の復活ではない。前節で述べたとおり、彼が問題にしてい

るのは社会、産業、思想などフランスの歴史全体、「生きた統一体」、「一個の魂」としてのフランスであるからである。ミシュレには「全体としての生命」に対する強烈な欲求がある²⁾。「生命は、それが完全無欠である限りでしか、真の生命ではない」（同書、99）。それゆえ、その内部の諸器官、すなわち社会、経済、産業、宗教などは全て互いに結びあっているものであり、それをメスで切り取って単独で摘出するならば、人体の諸器官と同じくそれはもはや意味をなさない。全体としての生命、そこに存在する完全な調和と統一性、そしてそれによって成り立つ歴史的な生命。人類史レベルでのそのような統一体の存在について、ミシュレはほとんど信仰にも似た確信を持っている。そしてそれを「復活」させることこそが、彼の歴史学が真に意図したことであった。

4. ミシュレの死生観

かつて私には困った病があつて私の青春を陰らせていた。とは言え、歴史家にはまことに適した病であつたらう。つまり死を愛していたのだ。ペール＝ラシェーズ墓地のすぐそばで9年間も暮らしたが、当時はそこが私の唯一の散歩場所だった（同書、114）。

前節で見たようなミシュレ独特の「歴史学」は時代の要請によって生まれたものという側面もあるものの³⁾、それ以上に彼個人の精神の産物であった。つまり死者への愛と、生命とその復活に対する信念がそれを誕生させたのである。ミシュレ自身が述べているとおり、彼はペール＝ラシェーズ墓地、家族や友人、その他見知らぬ多くの人々が眠るそこをしばしば訪れ、思索に耽っていた。しかし彼が感じていたのは死者への哀惜とか憐憫といった感情ではなく（無論それもあつたが）、まるで友人を相手にするかのような死者との交流の感覚であつた。

ミシュレにとって、死とは生の終わりではないし、死者は物言わぬ軀でもない。死者は「生きて」おり、そしてお互いに語り、生きているミシュレにも語りかけてくる。つまりある種の幽霊としての死者である。黄昏のいのちを生き、夜に、また雨上がりに、墓地の中をあちこち浮遊する存在、死に

よって不死性を獲得した人々、神の下で永遠の安息を得る前に、「生と死の素晴らしい劇場」である墓地で一時的「生」を送る人々。それがミシュレにとっての死者であった。生の始まりとしての死、死の後に訪れる復活。そのような信念こそが、前節で見たような死者の復活としてのミシュレの歴史学の基礎をなしている。

ミシュレはしばしば死者と交流した。それは精神的な、すなわち雨上がりの墓地で、あるいは国立古文書館の薄暗い一室でなされる彼の内面における対話であることもあったし、物理的なそれであることもあった。つまりミシュレはしばしば墓を暴き、実際に遺体と対面しているのである。例えば1839年に最初の妻ポーリーヌが亡くなり、彼女を埋葬した約一月後、ミシュレは墓を暴き、遺体と対面した後にそれを埋葬し直している。その時彼には「ほとんどうじ虫しか見えなかった」。しかしそこで彼は死の持つ神秘的な力と、その後に訪れる永遠の生の存在を強く意識した。

私をその両腕の中でとろけさせてくれた肉体（訳注：最初の妻ポーリーヌ）は、もはや「彼女自身」ではありえなくなったということ。このことを私は心霊主義に、「あの世」への信仰へと投げ入れた。……私は一つの物体からしか離れたのではないと得心した。人そのものはもうここにはいない。彼女は他にいると希望しよう（1839年7月26日付『日記』）。

死ぬことを学び取らなければならない。個性性としての生のあと、もし可能なら、普遍性としての生を始めなければならない（1839年8月26日付『日記』）。

その信仰について言うと、ミシュレは純粋なキリスト教徒ではない。若いころはキリスト教や教会に対しそこまでの敵意はなかったようであるが、壮年期から老年期にかけて徐々にキリスト教を人間の自然本性を抑圧し、死への恐怖によって支配するような敵対的存在とみなすようになっていく。キリスト教がそれらの「死」及び「生」に与える意味づけは、ミシュレの考えるそれとはあまりに異なっていることを思い知らされたからである⁴⁾。

そのため、上記でミシュレが語っている「死の後に訪れる生、復活」とい

う考えもキリスト教のものとは少し違う。キリスト教に従えば、例えばベアトリーチェは死後もベアトリーチェなのであるが、ミシュレの場合、死者たちはある一定の期間幽霊のような存在として過ごした後、その個性性を失って全体性としての永遠の生命のもとに溶け込んでいき、そこからまた新たに復活、再生していくという図式がイメージされている。これは明らかにキリスト教というより仏教やヒンドゥー教のような東洋の考えに近いもので、晩年の『人類の聖書』などではこうした東洋寄りの宗教思想がさらにはっきりした形で現れてくる。

前世紀の功績は、あんなにも長い間否定され翳らされていたアジアの徳性を、東洋の聖性を、再発見したということにある。……こうした疑問は、人類の大いなる類縁性への信頼であり、習俗や時代の多様な見せかけのもとに、変わることなくある魂と理性の統一への信頼であった。……こうしたこと全てから、大きな精神的結果が我々の許にもたらされた。アジアとヨーロッパの完璧な一致、はるかな昔の時代と我々の時代との一致が分かったのである。人間はあらゆる時に同じように考え、感じ、愛したということが分かったのである。……従って、唯一の人類が、唯一の心があるのであって、二つに分かれてあるのではないということが分かったのだ。空間と時間を貫く大いなる調和が、永遠に復元されたのである（『人類の聖書』、25-29）。

この『人類の聖書』は、以上のような人類と文明の時代・地域を越えた統一性という思想をその基盤としている。ミシュレはその「歴史学」の中で、ある時代の人々の中に存在する統一性を「全体史」という観点のもとに捉えようと試みてきた。そのミシュレが、19世紀前半における古代と東洋とに関する学問の発展に伴って得られた新たな宗教史的知識を動員して、フランス、あるいはヨーロッパという枠を越えた「人類」という普遍的な局面においてその「歴史学」を展開したものがこの書物であると言える。よって宗教は聖性や神観念といったいわゆる宗教的な主題の枠内においてではなく、他のさまざまな領域との関係において、すなわち気候風土や家庭生活、法や産業などとの関わりの中におけるある種の「人間の活動」として扱われる。そしてそれゆえにミシュレは起源においても内実においてもまったく異なる諸

民族とその宗教を、「人間」という共通の単位のもとで語ることができたのである。

しかし、ミシュレが諸宗教と人間の共通性、統一性を強烈な確信を持って語ることができたのは、そのような方法論上の理由だけによるものではない。それはむしろミシュレ自身が、彼ら古代インド・ペルシア・エジプト等の人々の宗教性の中に、自分自身の死生観、宗教観と共通の感覚を発見したことによる。端的に述べるなら、それは自然と生命に対する畏敬、愛情から生じるところのある種の自然汎神論的な死生観、宗教観であろう。

ああ！ 一人一人の人間が一つの普遍的歴史であり、一つの世界である。この偽りの小さな普遍が、全体的普遍、大いなる貪婪なる普遍と対決している！ ……なぜ神という思いがあまりなぐさめにならないのだろうか？ それはキリスト教の神が、魂を裁くからだ。魂は生き続けるだろう。しかし苦しむためにではないのか？ 汎神論の神は魂に休息を与えるだろう、魂を吸収しながらではあるが。……死は私たちに教えてくれる。各人の中に悪よりも大きな善があるというこの大きな真理を（1839年9月12日付『日記』）。

1850年、初老の域にさしかかったミシュレは二番目の妻アテナイスとの間に生まれた息子にラザールという名を付けている。これはヨハネ福音書11章に登場する死んで蘇った人ラザロのフランス語読みであり、既に50歳を過ぎたミシュレがこの息子の誕生、及びそれに先立つアテナイスとの出会いと結婚を「復活」として捉えていたことを伺わせる。「ああした困難の中で、私もまたいつか報われるだろうと感じていました。それは間違いではなかったのです。だってあなたがやって来て下さったのですから。あなたの若々しい涙で私を若返らせ蘇らせてくださるために」（1848年11月26日付アテナイス宛書簡）。それゆえ、それは自分の息子という形で誕生した新たな生命の「復活」でもあったし、また彼がアテナイスとの出会いで得た自らの「復活」という感情の確かな証でもあったのであろう。

しかし、生まれつき体が弱かったこの息子ラザールは、わずか一月半ほどでその短い生涯を終える⁵⁾。そしてこの息子をペール＝ラシェーズに埋葬する際、ミシュレはその4年前に亡くなった父の墓をあばき、その棺を開

けて再び遺骸と対面する。そしてそこに父と共に息子ラザールの亡骸を入れた上で、再び埋葬するのである。このラザールの本名はイーヴ・ジャン・ラザールといい、イーヴは妻アテナイスの父親から、そしてジャンはこのミシュレの父から取ったものであった。無論理念的な意味においてはあがあるが、おそらくミシュレはこの息子に父の「復活」をも見ていたのであろう。死と復活、そして再び訪れる死。しかしミシュレは死を憎まず、それを愛する。それは死を甘受するという意味ではない。彼にとって死を愛するとはその背後にある全体性としての不死性を愛することであり、それゆえミシュレは「歴史」を語るなのである。

歴史家の厳しい運命は、あんなにも多くのことを愛し失うことであり、人類の全ての愛と悲しみとを再び始めることだ。だが何ということ！過去のあれらの情熱が現在のそれに猶予を与えてくれるとは。何といても全ては死ななければならぬのだから、死者を愛することから始めよう。死者を愛すること、それは一つの不死なのである（1839年1月付『日記』）。

ミシュレの歴史は死者への愛と、永遠性、全体性の渴望によって支えられている。そしてミシュレのそのような愛と信念を強め、決定的なものとしたのが1839年の妻ポーリーヌの死であったのであろう。そして、その死の翌年である1840年、ミシュレはコレージュ・ド・フランスで新たな講義を開始する。それこそが歴史上はじめて「ルネサンス」という言葉が定義された決定的な瞬間であった。

5. ミシュレとルネサンス

ルネサンスという心地よい言葉は、美を愛する人には、もっぱら新しい芸術の到来と豊かな創造力の自由な飛翔を想起させる。学識豊かな人にとっては、古代ギリシア・ローマ研究の刷新である。法学者にとっては、われわれの古くからのしきたりの不統一で無秩序であることが、明らかになり始めた日である。それだけであろうか？（『フランス史Ⅲ』、

12)。

ここまで、彼が新たに生み出した「歴史」概念とそれを扱う「歴史学」の方法論、さらにそれらの基礎となるミシュレの精神について見てきた。ここでようやく、ミシュレが語る「歴史」の具体例としてルネサンスの問題に立ち戻る。この「ルネサンス」という歴史概念にこそ、これまで述べてきたミシュレの歴史学が最もよく現れている。すなわち、個別領域を越えた全体史としての歴史、復活 Renaissance を求める精神的傾向、これらが結実して生まれたものこそミシュレの「ルネサンス Renaissance」なのである。

ミシュレは歴史上初めて今日の教科書的な意味でのルネサンスという言葉 を 1840 年にその講義の中で用いた人物であるが、すでに述べた通りルネサンスという言葉自体はミシュレが創造したものではなかった。すでにこの 19 世紀には、15、6 世紀における芸術の革新、14 世紀から 16 世紀における古典研究の発展、これらを指す用語としてルネサンスという語が用いられていた。しかし、ここでミシュレは彼の歴史学に基づき、「外見上の多様さ をかつて生き生きと持っていた統一性の中に収斂」しようと試みる。すなわち、この芸術、学問、法律などの領域における別々の文化現象として扱われていたルネサンスに、ある統一的、全体的な意味を与えようとする。それが「すでに生命力を失っていた中世という老人の克服、世界と人間全体の生まれ変わり、復活としてのルネサンス」という概念である。

奇妙で怪物的で驚くほど人為的なものが中世の実態だったが、それは極端な継続期間を持ち、自然への回帰に対し執拗な抵抗をなしたことだけを自らへの有利な論拠としている。……時代と批判と思想の進歩にたたかれても、聖職者たちは教育と習慣の力によってつねにこっそりと再成長する。こうやって中世は、それがはるか以前に死んだがゆえに、いつそう殺すのが困難になって持続するのだ。……16 世紀の革命は、当時の哲学が死亡した 100 年以上もあとにやってきたもので、信じられない死に、また虚無に出くわし、無から出発したのだ。それは巨大な意志の英雄的噴出だった。16 世紀は一人の英雄なのだ (同書、14-19)。

ミシュレのルネサンスは、何よりも 16 世紀初頭に息絶えようとしている

偽りの統一性に満ちた「中世」という名の老人との決別という「反中世」の態度と、そこで新たに生まれ出た、若さと美しさ、生命力と活動性に満ちあふれた新たな人間世界、すなわち「近代精神」の出現という二つの発想に特徴づけられる。以下ではこの「ルネサンス」という概念を、もう少し詳しく見ていくこととする。

まずミシュレのルネサンス論が今日に至るまでの多くのルネサンス論と決定的に異なるのは、その起源に関する議論である。通常、ルネサンス研究者たちはほぼ例外なく（その直接の原因については諸説あるものの）その発祥の地として14世紀頃のイタリアを挙げ、そこで生じたルネサンスがいかにかヨーロッパ全体に伝播していったのかを論じる。しかしミシュレの語るルネサンスでは、それが生まれた時期は16世紀初頭とされ、そしてその原因は15世紀末におけるシャルル8世軍のイタリア遠征による「フランスとイタリアの出会い」に帰せられているのである。そしてこの出会い、「文明の衝突」によって生じたフランス内部における革命的な変化こそがルネサンスなのであり、それがヨーロッパ全体に伝播していったと論じられる。この今日からすれば奇妙としか思えないミシュレの理論は、いかにして生まれたのであろうか。

ミシュレのルネサンスが何よりも「老いた中世からの復活」という点を強調しているという点については既に述べた。そしてミシュレにとっては特に15世紀フランス史で描いているルイ11世やシャルル豪胆公の時代こそがその「中世」の象徴であり、彼が嫌悪したところの克服すべき時代であった。

なぜルネサンスは300年も遅れてやって来たのか？ なぜ中世は死後3世紀も存続したのか？ そのテロリズムと火刑台では（訳注：中世を生き延びさせるのに）十分ではなかっただろう。人間の精神はそうしたもののすべてを打ち砕いただろう。スコラ学が、そして「理性」に抗する大群の屁理屈家の創出が、中世を救ったのだ。……何世紀も続いた倦むことのない虚偽の文化、人間の知的能力をペシヤンこになるまで抑え込もうとする一貫した心遣い、それは成果をもたらしたのだ。……そこにこそ、まさに闇の核心がある。印刷術が、そこに光をもたらすということもなく、半世紀が過ぎる。……コンスタンティノーブルの攻略も、亡

命するギリシア人もほとんど助けにならない。……こうして偉大な発見、機械、物的手段、偶発的援助、すべてはいまだ役立たない（同書、87-89）。

印刷術、コンスタンティノーブルからのギリシア人亡命者、彼らがもたらした写本、これらはみな今日のルネサンス論においてルネサンスの主要因とみなされている 15 世紀の重要な出来事である。だがミシュレはここに、15 世紀にはルネサンスを見いださない。そしてこの嫌悪すべき時代の中、突然にシャルル 8 世が、イタリア遠征が現れる。そしてフランスは光り輝くイタリア、自国より 2 世紀も進んでいる（なぜなら 16 世紀のフランスは 14 世紀のイタリアとほとんど同程度であったから）優れた文明と歴史を持つ国イタリアと出会う。未だ 14 世紀の暗黒の中にいた「未開状態」のフランス、すなわち「中世文明」と、すでに 2 世紀も前にルネサンスを成し遂げ、新たな時代の精神を獲得したイタリア、すなわち「近代文明」とが衝突する。

王の周囲にはスコットランド人の護衛たちと共に、全身が金色と紫色の 300 人の弓兵と 200 人の騎兵が歩いていた。彼らは肩にいくつもの鉄の槌矛を担いでいた。それから、それぞれが 6 トンもする青銅の大砲が 36 台と、長いカルバリン砲が数台、小型軽砲が 100 台ほど軽やかに続いた。……これらすべてがローマの宮殿や長い通りの奥深くで、松明の灯りのもとと幻想的な影を伴い、現実よりも大きく、陰鬱で不気味な効果を伴って浮かび上がった。すべての人が、それが一つの軍隊の通過以上のものであり、これこそが大いなる革命である、ということを理解した。そして通常の戦争の悲劇が起きるだけでなく、習俗または思想そのものにおける普遍的で決定的な変化が起こるのだ、と（同書、96-97）。

習俗または思想そのものにおける普遍的で決定的な変化。これがミシュレの語るルネサンスである。イタリア遠征という文明の衝突からこの「ルネサンスという火柱」が立った。「大事件が起こった。世界が変わったのだ。ヨーロッパにおいて、いかに不動の国であれ、まったく新しい動きの中に巻き込まれない国は一つもなかった」。フランス軍がイタリアから持ち帰ったものは、偉大な歴史と文化であった。ここで二つの世界、二つの文明が混じり合

う。老いた中世は若々しいルネサンスによって駆逐される⁶⁾。

やや単純化したが、これがミシュレの描くルネサンスの基本的な図式である。しかし、ここまで見てきても、このルネサンス論が奇妙であるという印象は拭えない。15世紀末に若き王シャルル8世の軍隊がアルプスを越え、イタリアと出会った。そこから当時の進んだイタリアの文明を持ち帰り、16世紀フランス・ルネサンスが生じた。ここまではまだ理解できる。しかし、なぜすでに2世紀も昔にイタリアでルネサンスが始まっていたというのに、このアルプス越えと「文明の衝突」が、全ヨーロッパ規模における「ルネサンス」の出発点として主張されるのであろうか？

この疑問に関するミシュレの思考は明白である。老いた中世と若々しいルネサンスとは、必然的に出会わなければならなかった。なぜなら、老いた中世は再生しなければならず、逆にルネサンスとは老いた中世「から」の再生でなければならなかったからである。これはまさしく先に見たところのミシュレの思想である。死者は復活しなければならず、また復活するためには死を経なければならぬ。それゆえヨーロッパ「全体」の復活のためには、この二つの世界、老人と若者との衝突が必要とされたのであろう。

暗く打ちひしがれた中世であるところの15世紀はこの復活、「ルネサンス」を求めていた、とミシュレは語る。しかし、この「嫌悪すべき」15世紀史に取り組み、それを書き上げたミシュレ自身もまた、ルネサンスを求めていたのである。ここにおいて、ミシュレは死者＝歴史と同一化している。ミシュレであるところの15世紀、15世紀であるところのミシュレが、ルネサンスを、再生を、なぐさめを求めた。それがミシュレの語る16世紀ルネサンスであった。フェーブル(1996、211)は、このルネサンスについて「個人的な創造の成果。言葉の完全な意味において、まさにそうだった」と述べるが、それは正しい。15世紀が、そしてミシュレがルネサンスを望んだからこそ、歴史概念としての「ルネサンス Renaissance」が生まれたのである。

註

- 1) ミシュレにおいて、それは当然フランスとその国民を意味する。
- 2) ミシュレにおける「全体としての生命の復活」としての歴史学の概念については、フェーブル (1996、153-154)、および大野一道 (1998、224-225) など参照。
- 3) ミシュレの歴史学は大きく分類するなら 19 世紀のロマン主義史学に属するが、その歴史概念の形成に対しては特にヴィーゴやヴィクトル・クーザンの歴史哲学の影響が大きい。ミシュレの歴史学とロマン主義の関連についてはフェーブル (1996、57-114) 参照。
- 4) このため、後年アテナイスと再婚した際も宗教儀礼なしでの結婚を行っている。
- 5) この短命な息子の死に際し、妻アテナイスはこの赤子の地獄行きを恐れ、ミシュレの意に反してその臨終の間際に誕生の時に受けさせていなかった洗礼の秘蹟を授けさせた。ミシュレは妻に対してではなく、そのようにして人を恐怖で縛り付けるシステムとしてのキリスト教会に対して憤慨する。
- 6) 無論、ミシュレの描く 16 世紀史はここでハッピーエンドで終わるわけではない。このすぐあとには宗教改革と泥沼の宗教戦争、そして数々の悲劇が描写される。生まれたばかりのルネサンスの光は旧教派との戦争の中で失われてしまう。民衆の中から湧き上がってきた全体的な生命は反動勢力によって押しつぶされる。こうした見立てがミシュレの 16 世紀理解であり、その『フランス史』は最終的に 1789 年のフランス革命へと向かって進んでいく。

参考文献

- ヴァザーリ、G. 『美術家列伝』 (森田義之他訳) 中央公論美術出版、2014 年。
- ヴィーヴェス、J. L. 『学問伝授論ないしはキリスト教伝授論』 (『世界教育学選集 31 ルネッサンスの教育論』、小林博英訳)、明治図書出版、1964 年。
- 大野一道 『ミシュレ伝』 藤原書店、1998 年。
- バルト、R. 『ミシュレ』 (藤本治訳) みすず書房、1974 年。
- フェーブル、L. 『ミシュレとルネサンス』 (石川美子訳) 藤原書店、1996 年。
- ブルクハルト、J. 『イタリア・ルネサンスの文化』 (柴田治三郎訳) 中央公論社、1979 年。
- ミシュレ、J. 『フランス史Ⅲ』 (大野一道他編訳) 藤原書店、2010 年。
- ミシュレ、J. 「全体としての生命の復活—『フランス史』1869 年の序文」、『世界史入門』 (大野一道編訳)、藤原書店、1993 年、97-140。

ミシュレ、J. 『人類の聖書』 (大野一道訳) 藤原書店、2001 年。

Michelet, Jules, *Renaissance*, Histoire de France 7, Sainte Marguerite sur Mer, 2008.

Michelet, Jules, *Réforme*, Histoire de France 8, Sainte Marguerite sur Mer, 2008.

Michelet, Jules, *Guerres de religion*, Histoire de France 9, Sainte Marguerite sur Mer, 2008.

The Birth of the Renaissance and Jules Michelet's View of Life and Death

by Ryohei HIRUMA

The age of the Renaissance in 14-16th century Europe, is the transitive period in which people became interested in the ideas and cultures of ancient Greece and Rome, when their views of nature started to change, and medieval culture gradually turned into modern culture. It is often said that the idea of the Renaissance was first used by 19th historian Jacob Burckhardt, who defined it as the age of the discovery of the world and human beings, and many scholars regard him as the father of the Renaissance.

However, Burckhardt admitted he owed the idea of “the discovery of the world and human beings” to Jules Michelet's *Histoire de France*. In spite of his contribution toward the birth of the Renaissance as a concept, Michelet is almost forgotten and his historical works are seldom referred to in Renaissance studies today. The reason for this omission seems to be derived from his characteristic theory of history. For Michelet, historical materials were not considered as statistical data or so on, but as ghosts or phantoms uttering and mumbling to him. Like a shaman in primitive society, he resurrected the dead, unified with them in his mind, and told their stories on behalf of them. His unique theory came from his view of life and death that was characterized by non-Christian pantheism and the belief in reincarnation.

In this paper, first, Michelet's unique historical theory and his understanding of human history are described. Second, his view of life and death, which influenced his idea of history, is surveyed. Finally, the process and motives with which he created his idea of the Renaissance are discussed.